（第三種郵便物認可）

H20.10.22.(水)

コレステロール値 専門家間で意見対立

LDL基準140？190？

健康診断でおなじみのコレステロール。数値が高いと動脈硬化が起こり、心筋梗塞（こうそく）などにつながる恐れがあるとして薬物治療を受けることもある。ところが、どのくらいの数値が問題かをめぐって、専門家の間に意見の対立が起こっている。

コレステロール基準の妥当性が議論された日本脂質栄養学会のシンポジウム

コレステロールは体内で細胞膜やホルモンなどの原料となる脂質。ほぼすべての細胞で合成され、食物から取る量より体内でできる方が多い。

余ったコレステロールは血流に乗って肝臓に運ばれ、蓄えられる。そこから再び全身に送られたり、消化や吸収を助ける胆汁酸として小腸に分泌されたりする。

コレステロールは血液中ではタンパク質に包まれた複合体になる。肝臓を出るときと肝臓に向かうときではタンパク質が違い、出るときは「LDLコレステロール」、向かうときは「HDLコレステロール」になる。

お昼も石窯パン！
タカキベーカリー

学会の指針に批判も

脂質異常症の診断基準

【診断基準】

- ☆ LDLコレステロールが140以上
- ☆ HDLコレステロールが40未満
- ☆ 中性脂肪が150以上

LDL以外の動脈硬化の主な危険因子

- ☆ 高血圧
- ☆ 喫煙
- ☆ 糖尿病とその予備軍
- ☆ 加齢（男性45歳以上、女性55歳以上）
- ☆ 心臓病を起こした家族がいる

（日本動脈硬化学会のガイドラインによる）

動脈硬化との関連が指摘されているのはLDLコレステロールだ。しかし、そのメカニズムはまだよく分かっていない。

「LDLコレステロールが血液中で滞留すると酸化され、動脈にたまって動脈硬化が起こるという説が有力だ」と横山信治名古屋市立大教授。

1万人データが根拠

日本動脈硬化学会は動脈硬化が引き起こす心筋梗塞や脳卒中などの予防ガイドライン（指針）を作成。LDLコレステロール「一四〇」（一〇〇cc中一四〇ミリグラム）以上を「脂質異常症」とする診断基準を示した。

根拠となったのは、旧厚生省が一九八〇年から全国約一万人を追跡したデータに基づく研究だ。

この研究では、コレステロール値としてHDLコレステロールなども含めた「総コレステロール」が使われた。指針はこの研究について、総コレステロールが高くなるにつれて、心臓病による死亡の危険度が連続的に上昇することが確かめられたと評価。

それを基に、総コレステロール「一六〇―一七九」に比べて死亡の危険度が一・五倍になる二二〇を基準に設定し、そこから換算してLDLコレステロールの基準を一四〇に据えた。

大櫛陽一東海大教授はこの基準を疑問視する。データを検証すると、総コレステロールが「一六〇―一七九」より死亡の危険度が高いのは「二六〇以上」だけ。

大櫛教授が全国約七十万人の健診データなどを基に調べた結果、LDLコレステロールの正常範囲は一九〇までとなり、欧米の基準と一致した。

「患者の抽出が目的」

この問題で日本脂質栄養学会は九月に大阪市でシンポジウムを開いた。

指針を取りまとめた寺本民生帝京大教授は大櫛教授の指摘を認めた上で「数値が低くても糖尿病や喫煙など、ほかの危険因子を持っている人がいる。薬物治療を始める基準ではなく、そうした患者を抽出するための基準だ」と説明した。

大櫛教授は「今の基準は科学的でない。指針が五十五歳以上の女性は脂質異常症の危険が高まるとしているのも、欧米の常識に反する。患者抽出が目的だと言うが、現実には薬物治療の基準として使われている」と批判した。